

「我が人生思い残すことなし」(前編)

きたごう はると
作：北郷 遥斗

※ 前回までのあらすじ ― 神戸の大空襲の後、戦火を避けるため、きみたちは、実家のある広島へ疎開した。昭男は1人神戸の家に残り、軍隊に志願できる時期を待った。だが、戦況はますます終局に向いつつあり、周りでは「沖縄に米軍上陸」との話までさやかれた。そんな中昭男は次第と焦りと不安を深めていった。 ―

(尚、ホームページでもこれまでのストーリーを見る事が出来ます。 www.kyodo-keiei.co.jp)

5. 父親

昭男の父の治一（はるいち）は、昭男と30才違いの典型的な明治生まれの一本気な気質だった。結局それはやっぱり昭男にも引継がれているのだが、それだけにやはり気丈な母きみとは何かと折合いが悪く、いつもぶつかっては口論が絶えなかった。

父は市中を廻っては、古道具や木材などを殆どただ同然で集め、それを近所や身内に売ったり、修理等を手伝ったりして、日銭を稼ぐ仕事をしていた。いや「仕事」などと呼べる立派な事でもなかったかも知れない。そのくせ毎日酒浸りになっては、気に入らない事があれば我が者勝手に振る舞い、声も手も上げる態度に、きみはもう「あきあき」していた。中でも昭男はいつも父と母との間に入ってはそのとばかりをまともに受け、それでも何も出来ず、無力さを痛感しては父を疎んじた。また、父は二日酔いや気が進まない日には昭男を学校へも行かさず、自分の代わりに「仕事」に走らせる事もしょっちゅうだった。そんな日はたいがい酒を買いにも行かされた。そんな父に「こき」使われる昭男の姿を見て仕事先や酒屋の主人達は同情し、何かと便宜を図ってくれたりもした。昭男はだからこそ、そんな中で成長し生きていく「術」を、身に付けていった。



そんな父親だったが、彼にも彼なりの境遇がその人生に大きく横たわっていた。奈良のちょっとした田畑（でんばた）地主の4男として生まれたものの、土地を継がせ様にも上の3人の兄弟とも健在で、分け与えられるものはなく、尋常小学校を出るとすぐに遠縁の冶金職人の家に養子に出された。と間もなくその家に跡取りの長男が生まれ、その内煙たがられる様になると半ば追い出される様に家を出た。



それからというもの、20年近く浮浪生活が続き、その耐え難い「苦痛」は、言葉に尽せないものだったに違いない。大人たちの勝手な都合で「物」の様に扱われる憤り、地位や財産を持たぬ者は、どう足掻いても社会の底辺にしか置かれない不正義、一部の権力者だけが国を牛耳り、好き勝手に国民を虐げる理不尽さ。次第に治一は社会主義思考、軍国主義批判の気持ちに流されて行く。

そんな頃、雑役の仕事をしていた大阪の旅館で、住み込みで下働きとして雇われていたきみと知り合い、その内所帯をもつ様になる。父が「おれは最初から居らんかったもんと思え。」一方的にそう言い残して突然家を出て行ったのはそれから15年後。去年の夏の事だった。「戦争がいやで、本土決戦の前に出奔しよった。」近所の人には口々にそう噂した。

「恥や、非国民や」昭男は本気で父を憎んだ。

(つづく)